

## <論文>

# 日韓両言語の身体語を含むことわざに関する対照研究

賈 惠 京

## A Comparative Study about Proverbs that include Physical Terms in Japanese and Korean Languages KA Haegyong

キーワード：ことわざ, 身体語, 日韓語比較

Keywords: A Proverb, A Physical Term, Comparison between Japanese and Korean

### 1. はじめに

ことわざとは名も知れぬ誰かに作られ, ある特定集団の構成員に了解・共有され, 伝承されてきた成句である。その内容は人間生活のあらゆる側面に言及しており, 短縮され精選されたことばの数々は心理の機微をつき, 生活の知恵となっているといえる。それぞれの国や地域の人々の経験的信念と道徳的観念・思想・生活習慣が凝縮されていることばだからこそ, これを読んで吟味することにより民族性を理解・把握することができる。本研究の目的は, 日本語と韓国語における身体語を含むことわざについて, 対照的に分析を行うことで, 日韓の民族性を論証, 教育的効果を明らかにすることにある。

### 2. 研究対象及び方法

#### 2.1 語彙調査

本研究においては人間の意識と無意識を繋ぐことばで, 理解し易く, 多様な表現を有するという特徴を持つ身体語を含むことわざを対象とする。身体語は, 身体部位そのものと身体に発生する一時的な身体部位を示すもの, 身体部位ではないが身体から生ずる生理的現象, 身体から起因すると考えられる精神的作用のものと, 大きく分けて3つに捉えることができる。具体的には, 身体部位を形成している[頭・目・手・腹・肝]などや, 一時的に身体に生じる[瘤・痲り・皸・染み]などがある。次に, 身体そのものではないが, 身体による分泌物・排泄物として捉えられる[涙・汗・尿・糞・ふけ]などが挙げられる。最後に, 人間の精神世界に属するもので[念・気・精・魂]などのような身体における観念的なものがある。

本研究での身体語彙とは, 基本的に身体そのものだけに限定し, 部位として捉えられるものを[頭部・四肢部・胴体部]とに分類し, 全体を捉えているものを[全身部]とし, 大きく4つに分けて数量的分析を行った。数量的分析研究の資料とした辞典は, 日韓両言語共に収録語数が最も多いものを使用した。日本語は『故事俗信ことわざ大辞典』(1982)<sup>1)</sup>を, 韓国語は『한국의 속담 대사전』(2006)<sup>2)</sup>を用いて, 身体語を含むことわざについての数量的分析を行った。日本語と韓国語においてことわざと結びつくそれぞれの身体語は, 必ずしも一致するとは限らない。日本のことわざに見られる[睫・目玉・目尻・鼻の下・腋の下・腸・胴・筋]などの身体語は, 韓国のこ

とわざにはほとんど見られない。一方で、韓国の[内股・ひかがみ・手の甲・足の甲・足先・踝・胆嚢・肛門]などの身体語を含むことわざは、日本のことわざにはほとんど見られない。

また、ことわざ表現のなかで、身体部位によっては、細部にわたり捉えられている場合もある。例えば、鼻(코)においては、[鼻穴(콧구멍)・鼻筋(콧등)・鼻柱(콧대)・鼻の先・鼻の頭]などがある。目(눈)においても、[目尻(눈꼬리)・瞼(속눈썹)・瞳(눈동자)・目玉(동자)]などがある。或いは、同じ身体部位においても、様々な名称で表現されている同義語が存在する。例えば、額(이마)においては、[おでこ(이마꼭)・おでび(이마빼기)]などがあり、顔(얼굴)においても、[面(낯)]があり、背(등)においても、[せな(등가죽)・背中(잔등)]などがある。しかし、このようなことは日本語と韓国語で同様であるとは限らない。また、日本語は漢字から派生した名称がほとんどであるが故、[ひげ(鬚・鬚)・あご(顎・腮)・み(身・躬・軀)]のように、漢字違いで同じ身体語を表わすものがある。一方で、[額(ひたい・おでこ)・頭(あたま・かしら)・腸(はらわた・ちしょう)・背(せ・せな)]のように、同じ漢字で違う読みをした身体語が存在する。

韓国語の[爪]と[指]の場合、[손톱(手の爪)・발톱(足の爪)]や[손가락(手の指)・발가락(足の指)]のように細かく捉えられている。これらの身体語は、ことわざにおいて、多様に活用されて独特な表現を生み出している。

## 2.2 語彙の数量的分析

本研究で日韓それぞれのことわざ辞典による身体語彙を含むことわざの用例数は、日本は総数3592用例、韓国は総数3681用例であった。一つのことわざの中に二つ以上の身体語彙が含まれている場合は、ことわざ辞典に掲載されている用例に関わらず、身体語彙の数で用例数を数える延べ数として算出し、分析に当たった。

表1 日韓ことわざ辞典における身体語彙

	日本語(故事俗信ことわざ大辞典)		韓国語(한국의 속담 대사전)	
	用例数(比率)	身体語項目数	用例数(比率)	身体語項目数
頭部	1649(46%)	30	1740(47%)	30
四肢部	884(25%)	26	909(25%)	29
胴体部	387(11%)	15	736(20%)	17
全身部	672(19%)	7	296(8%)	6
合計	3592	78	3681	82

身体語を大きく4つの部位に分けて分類し算出した結果、[頭部] (日本1649, 韓国1740), [四肢部] (日本884, 韓国909), [胴体部] (日本387, 韓国736), [全身部] (日本672, 韓国296) という数値結果になった。外部に露出されており感覚器官が集中している頭部に用例数が最も多く、次いで四支部の用例数が多いという結果になり、これは日韓両言語に共通している。

## 3. 身体語彙を含むことわざに見られる諸相

表 2

### 3.1 頭部における身体語彙の種類と数量的状況

身体語彙を含むことわざを[頭部・四支部・胴体部・全身部]の4つの部位に分けて用例数を算出した結果、日本の頭部は全体の46%である1649用例、韓国の頭部は全体の47%である1740用例の数値となっている。また、頭部における身体語項目は日本が78項目中30項目で38%、韓国が82項目中30項目で37%と、日韓共に高比率である。4つの部位の中では、最も高い用例数となっている。その様相を表2に示した。

日韓語共に、特定の身体語彙には複数の名称が存在する。日本語には[髪・額・眉・目・目玉・髭・顎・頭・顔]に複数の名称があり、韓国語には[머리(髪)・이마(額)・눈(目)・눈동자(瞳)・눈두덩(臉)・입(口)・이(歯)・혀(舌)・목(首)・머리(頭)・얼굴(顔)]に複数の名称がある。日韓語を比較してみると、必ずしも同じ身体語に複数の名称が存在するとは限らないが、韓国語の方が複数名称の身体語が多いことが分かる。

口の用例数は日本が韓国より極端に多く、対して頬の用例数は韓国が日本より極端に多い。この結果から考えられることは、日韓語における[口・頬]の意味の隔たりが挙げられる。[口]と[頬]についての意味を、日韓それぞれの国語辞典を以て調べた。【①動物の消化器系の開口部、食物を取り入れる器官。発声にも関係する。②①に似ているところから㉞人や物の出入りするところ。③容器の中身を出し入れするところ。④物の、外部に開いたところ。⑤就職や縁組みなどの落ち着く先。⑥物事を仕分けしたときの、同じ部類に入るものの内の一つ。また、その種類。たぐい。⑦物事の初めの部分。また、まだ始まったばかりのこと。発端。⑧物の端。⑨雅楽の一曲や義太夫節の一段を細分したときの最初の部分。⑩①が飲食するための器官であることから㉞食べ物好み。味覚。⑪生活のために食料を必要とする人数。⑫食べる量。⑬《①が言語器官であることから》㉞口に出して言うこと。ものの言い方。⑭世間の評判。噂。⑮口出しをすること。また、その意見。⑯話す能力。⑰客の呼び出しがかかること。また、友人などから誘いがあること。⑱馬の口につける縄。口取り縄。⑲直径。さしわたし。】などが日本の国語辞典に掲載されている口の意味である。【①唇から喉頭までの部分。食べ物や餌をとり、音を出す機関。②食べ物を食べる人の数。】などが韓国の国語辞典に掲載されている口の意味である。

頬においては、【①顔の両面、耳と鼻・口との間の柔らかい部分。】が日本の国語辞典に掲載されている頬の意味である。【①顔の両方の顛顛から顎上までの身が多い部分。②長細いものの幅。】が韓国の国語辞典に掲載されている頬の意味である。

このように、口は日本語が、頬は韓国語がより多彩で深い意味が含まれていることが分かる。広範囲に用いられている意味と、ことわざの用例数とに、相関関係が成り立つのではないかと推し量られる。

目と鼻と耳のように、細部にわたり使われている身体語彙が日韓語共に存在する。視る、嗅ぐ、聴くなどの感覚的な機能が備わっている器官であり、目と鼻は日本語の名称がより細分化されており、耳は韓国語の名称がより細分化されている。

用例数の多い身体部位として、日本は目(353)、口(296)、頭(208)、顔(151)、耳(144)、鼻(82)の順に多く、韓国は目(428)、顔(216)、口(179)、鼻(116)、耳(115)、頭(91)の順に多かった。目、鼻、口などの感覚器官が集中している頭や顔などの身体語が含まれていることわざがかなり多いと

いう点が、日韓ともに共通している。

最も多い日韓の目に関することわざは下記のとおりである。

- ・ **目よりも耳で妻を選べ**「妻とする女は、見ための容姿よりも評判を耳で確かめてから選べ」
- ・ **目を剥くより口を向けよ**「大きな目をして怒るよりは、口でよく言って聞かせるほうがずっと効果がある」
- ・ **目を過れば忘れず**「一度見たことは決して忘れない」
- ・ **가족이 모자라서 눈을 냈는가**(皮が足りなくて目を出したのか)「他人はた易く目に見える物事を見過ごしてしまう人をからかう言葉」
- ・ **눈 뜨고 도둑 맞는다**(目を開けて盗まれる)「分かっていながら、騙されたり損害を被ったりする」
- ・ **계집의 얼굴이란 눈의 안경**(女の顔は目の眼鏡)「女の顔の綺麗さは、見る人により異なる」

また、日韓語に極端な差のある身体語彙として、頬が挙げられる。日本語は下記の2用例、韓国語は下記以外にも62用例もある。

- ・ **頬を面へ直す**「実質に変わりはないが、名目だけを変えるたとえ」
- ・ **食事するとき舌を噛めば謗られる,頬を噛めば誉められる**「俗説,周防山口付近の俗諺」
- ・ **내 것 주고 뺨 맞는다**(自分のものを与えて頬打たれる)「人に親切をして、損を被る」
- ・ **거짓말하고 뺨 맞는 것보다 낫다**(嘘ついて頬打たれるよりましだ)「過ちを犯してから嘘をきばれるより、正直に申し出たほうがよい」

### 3.2 四支部における身体語彙の種類と数量的状況

[頭部・四支部・胴体部・全身部]の4つの部位のなかで、日本の四支部が占める割合は全体の25%である884用例、韓国も全体の25%である909用例の数値となっている。また、四支部における身体語項目は日本が78項目中26項目で33%、韓国が82項目中29項目で35%と、日韓共に比較的高比率である。4つの部位の中では、頭部に次いで高い数値となっている。

日韓語共に、特定の身体語彙には複数の名称が存在する。日本語には[脇・腋の下・肱・掌・脛・膝]に、韓国語には[손목(手首)・엉덩이(尻)・장단지(脛脛)・발목(足の首)・발등(足の甲)・발꿈치(踵)・발끝(足先)]に複数の名称がある。特に日本語には漢字から派生した名称がほとんどであるが故、[脇・肱・掌・脛]のように漢字違いで同じ身体語を表わすものが、多数存在する。また、細部にわたり使われている身体語彙が日韓共に存在する。物を掴んだり、触ったり、持ったり等の技能を有する手は、[掌・手の甲・手の指・手の爪]などに細分化されている。韓国語の指と爪は、手と足に細分化された状態で技能を有している。脚は[股ぐら・脛脛・腿・股・脛・内股・ひかがみ・膝]に、足は[足の甲・踵・足先・踝・足の裏・足の指・足の爪]に細分化されて使われている。韓国語の足の部位は、日本語の足の部位に比べ細分度や用例数が著しく高比率を示している。また、脚と足の用例数が日本は足に集中しており、韓国は脚と足が比較的同等の数値を成している。これらのことから、日韓語のあし(脚,足)に対する独特な性質が推し量れる。脚に関する日本のことわざは次の2用例のみで、韓国のことわざは次に示す用例以外にも109用例もある。

- ・ **鷲に尾が無いとて脚切つて継がれもせず**「物にはそれぞれの特性があるのだから、いたずらに手を加えてはいけない」
- ・ **是非の名は翼無うして飛び,損益の名は脚無うして走る**「よい評判も悪い評判も瞬く間に知れ

わたり,隠れることがないものである」

- **가랑이에 두 다리 넣는다**(股に二つの脚を入れる)「忙しく慌てふためき暴れ狂う様子をいう」
- **개를 기르다 다리를 물렸다**(犬を飼って脚を噛まれた)「助けてあげたのに,人から害を被った」

用例数の多い身体部位として,日本は手(292),足(159),尻(120)の順に多く,韓国は足(186),手(163),脚(111)の順で,似通った結果となった。

### 3.3 胴体部における身体語彙の種類と数量的状況

[頭部・四支部・胴体部・全身部]の4つの部位のなかで,日本の胴体部が占める割合は全体の11%である387用例,韓国は全体の20%である736用例の数値となっており,日韓語に用例数の差がみられる。また,胴体部における身体語項目は日本が78項目中15項目で19%,韓国が82項目中17項目の21%となっている。

[頭部・四支部]と同様,特定の身体語彙には複数の名称が存在する。女陰と肛門において,日本の用例数が極めて少ないことに対して,韓国は名称も用例数も極端に多く,著しく差が目立つ結果となった。日本において男性器や女性器の使用は,明治時代以降,川柳や艶句での表現はあるものの,あからさまな場所での使用は好ましくないという社会の風潮がある。このことから,国語辞典に掲載されている一般呼称語ではなく,言い換えによる隠語や方言などの身体語が多用されていることが分かる。それ故,本研究で採択した『故事俗信ことわざ大辞典』には,その身体語を用いた用例数が極めて少ないと考えられる。男性器と女性器に関する日韓のことわざは下記の通りである。

- **鼻大なれば一物大なり**「鼻の大きい男は男根も大きいという俗説」
- **火事に向かって小便をすると男根が曲がる**「やまなしの方言と俚諺」
- **口の大きな女は陰門が大きい**「男の鼻が大きいのと対比していわれる俗説」
- **女が男を跨ぐとおめこが裂ける**「安芸三津漁民手記」
- **남자는 좃 방망이로 흥하고 망한다**(男は陰茎の棒で興って亡びる)「男は性器を正しく使うと幸せになるが,間違っ使用と不幸になる」
- **남자는 좃이 커야 정력도 강하다**(男は陰茎が大きくてこそ精力も強い)「性器の大きい男は色情も盛んであるという俗説」
- **국 쏟고 보지 덴다**(スープをこぼして女陰の火傷をする)「不幸な事が重なる」
- **궁둥이 보고 보지 봤다고 한다**(尻を見て女陰を見たと言う)「小さな事を大げさにいう」

また,日韓共に,身体語彙の中の乳は二種類の意味を有している。一つは哺乳類の胸や腹にある皮膚の隆起した乳腺の開口部で,乳房の意。もう一つは,哺乳類が分娩後に子を育てるために乳腺から出る乳白色の液体の意。日本の『故事俗信ことわざ大辞典』に掲載されている用例によると,[乳をおむつで拭くと出が悪くなる]のように前者の意味を成す乳は6用例存在する一方,[お産の後百日以内に柿を食べると乳が出なくなる][泣く子に乳]のような後者の意味を成す乳は8用例存在する。このような状況は韓国の『한국의 속담 대사전』に掲載されている用例においても同様で,乳房の意味としての젖(乳)が3用例,母乳の意味としての젖(乳)が24用例ある。本研究においては,前者の意味に該当することわざを蒐集した。後者に該当することわざが前者に該当することわざより多数存在したので,今後の考察課題とする。

用例数の多い身体部位として,日本は腹(156),背(61),腰・臍(32)の順に多く,韓国は腹(165)

, 女陰(115), 陰茎(105), 背(69), 金玉(55)の順に多かった。

### 3.4 全身部における身体語彙の種類と数量的状況

[頭部・四支部・胴体部・全身部]の4つの部位のなかで、日本の全身部が占める割合は全体の19%である672用例、韓国は全体の8%である296用例の数値となっている。また、全身部における身体語項目は日本が78項目中7項目で9%、韓国が82項目中6項目の7%となっており、日韓共に比較的低位率という結果であった。

日韓共に、特定の身体語彙には複数の名称が存在する。日本語には[身]に、韓国語には[몸(体)・뼈(骨)]に複数の名称がある。[頭部・四支部・胴体部]において、日韓共に細部身体語彙が存在したことに反して、[全身部]においては存在しないという特徴がある。

用例数の多い身体部位として、日本は身(342)、血(91)、皮(73)、骨(67)の順に多く、韓国は毛(79)、体(52)、皮(50)、骨(43)の順に多かった。日本は韓国に比べて身の用例数が著しく多いが、その要因の一つには身に対する意味の相違があると考えられる。日本の身を国語辞典で調べると次のように掲載が成されている。【①生きている人間のからだ。身体。②わが身。自分自身。③自分が何かをやるとうとする心。誠心。④地位。身分。立場。⑤皮や骨に対し、食べられる部分。肉。⑥容器の蓋に対して物を入れる部分。また、蓋付きの鏡などで、蓋に対して、本体の部分。⑦衣服の袖・襟・衽などを除き、胴体を覆う部分。身頃。⑧刀の鞘に収まっている刃の部分。刀身。⑨木の皮に包まれた部分。⑩身ぶり。】以上10項目が身の意味として挙げられた。韓国の살(身)に該当するのは⑤のみであった。本研究の対象となったのは身体語彙としての意味となる①、⑤のみである。日本の身を含むことわざが圧倒的に多いのに関連性があると考えられる。身に関する日本のことわざは下記の2用例以外にも340用例あり、韓国のことわざは下記に示す用例以外には30用例のみで、日本と比べると極めて少ない。

- ・ **悪事身にとまる**「自分の犯した悪事は、自分の身に帰ってくる」
- ・ **まめ息災が身の宝**「体が丈夫で災難にあうことなく、健康に過ごせることが何よりの宝」
- ・ **까마귀는 검은데 살은 희다**(烏は黒くても身は白い)「外見は醜くても、中身は美しい」
- ・ **살이 살을 먹고, 쇠가 쇠를 먹는다**(身が身を食べて、牛が牛を食べる)「親戚同士友達同士が争い傷つくこと」

また、皮においても、日韓に意味の相違がみられる。まず、日本語は【①動植物の肉・身を包んでいる外側の膜。表皮。②物の表面にあつて、中身を覆ったり包んだりしているもの。③物事の表面にあつて、本質を覆っているもの。】であることに対して、韓国語は【①動物の身を包んでいる外側の膜②動物の表皮を加工して作ったものを指す。】である。日本は韓国よりも皮の意味が広範囲であるが故に、用例数が多いと考えられる。本研究の対象となったのは、日韓共に①のみであった。

以上、身体語彙を含むことわざを[頭部・四支部・胴体部・全身部]の4つの部位に分けて数量的分析を行った。算出した結果を用例数からみると、日本は頭部、四支部、全身部、胴体部の順に多く、韓国は頭部、四支部、胴体部、全身部の順に多いという結果となっている。このようなことから、身体の内部の器官よりは外部の器官の部位の方が機能や役割からみて、ことわざに組み込まれる対象となり易いことが考えられる。さらに、四肢部よりは頭部に、人間の思考や感覚などを管轄する知覚器官が集中していることから、ことわざへの使用頻度の高さが推し量られる。要するに、ことわざで多数用いられている身体部位は、体の中での機能や役割が可視的で感覚的

な部位に集中していると考えられた。

また、同じ身体部位であっても日韓においての意味の差により用例数に差がみられたが、多彩な意味を有する側のことわざに多数の用例が表れた。身体語彙における同義語の数と用例数との関係は、同義語が多いほど用例数が多いといった、比較的比例関係にあることが分かる。また、細部身体部位の数と用例数との関係においても、比較的比例関係にある。つまり、身体部位名称の数と細部身体部位名称の数はことわざの用例数と比例関係にあることを端的に示している。

さて、韓国のあいさつことばは、いくつかの基本的な場面において、一応定型として捉えられ、るとしても、表現そのものは実質的な内容が具体的に描写されており、その点から省略形や含蓄的なものはほぼないと言っても過言ではない。渡辺吉鎔(1981)<sup>3)</sup>は、韓国のあいさつことばの性格を十人十色と特徴づけている。朝起きると日本人は決まり文句のように「おはようございます」というが、韓国人は皆が一律的なことばを用いない。「夜寒かったね」「うるさくなかった」「よく寝られた?」「夜の間雨が降ったね」と相手によって、様々な朝のあいさつとなる。これに慣れてない日本人にしてみたら戸惑いを感じるのだろう。一方、日本人の「すみません」の用法に大半の外国人は戸惑いを感じる。過ちを謝るときのみならず、感謝や遠慮、切り口など様々な場面で使われているからである。韓国のあいさつことばは具体的・事実的であり、日本のあいさつことばは抽象的である。

これと繋がり、ことわざにおける身体語彙は、日本語は抽象的であり、韓国語は具体的であるといえよう。日本語は[口・身・皮]などのように多様な意味を含む身体語彙が多数存在するという観点からも、比較的に細部部位の用例数が少ないという観点からも、韓国語に比べて抽象的な様相を有している。韓国語は身体部位が具体的に細かく細分化されている側面からみても、具体性があると考えられる。

#### 4. まとめ

身体語彙を含むことわざを[頭部・四支部・胴体部・全身部]の4つの部位に分けて数量的分析を行った結果、以下のようなことが指摘できた。

(1) 日本は頭部、四支部、全身部、胴体部の順に多く、韓国は頭部、四支部、胴体部、全身部の順に多く、身体の内部の器官よりは外部の器官の部位の方が、ことわざに組み込まれる対象となり易いことが考えられた。

(2) 日韓共に、四肢部よりは頭部に多く用いられている点から、人間の思考・感覚などを管轄する知覚器官が集中している身体部位がことわざに多用されていることが考えられた。

(3) 多彩な意味を有する身体部位を含むことわざには多数の用例が現れ、日本語の口、身、皮などで立証された。

(4) 身体部位同義語の数と細部身体部位の数は、ことわざの用例数と比例関係にあり、韓国語が日本語より多く現れた。

以上のことから、ことわざに組み込まれる対象となり易い身体部位は[全身部・胴体部]よりは、[頭部・四支部]のように、身体の内部の器官よりは外部の器官の部位である点が、日韓語に共通している。なお、ことわざにおける身体語彙は、日本語は抽象的であり、韓国語は具体的であるといえる。このような特徴は、日本と韓国それぞれの地政的、歴史的背景の違いによる生活習慣や物の考え方など独特な文化からであると考えられる。また、両国のことわざと身体語彙の取り扱い方についての異同は韓国語や日本語を勉強する人々に参考になるものと思われる。具体例



として、日韓の身体語を含むことわざを授業に取り入れてみたところ、学生の学習効果が上がったことが指摘できる。その要因として考えられるのは、①独特な表現の違いがはっきりと際立っており、印象深く、覚えやすい。②独特な文化により形成されたため、異文化の理解に役立つ。③身体語は身近なことばとして、親しみやすく、理解しやすい。といったことが挙げられる。

賈惠京（鳥取大学非常勤講師）

#### 参考文献

- 1) 学図書辞書編集部(1982)『故事俗信ことわざ大辞典』小学館
- 2) 정종진(2006)『한국의속담대사전』대학사
- 3) 渡辺吉鎔(1981)『朝鮮語のすすめ』講談社